作品集 澎湃 卷二

特259
97

始

福田米三郎選集

昭和十四年
帝國圖書館藏

特259
97

作品集 澎湃 巻二

飛ぶ如く

福田米三郎

『飛ぶ如く』目次

飛ぶ如く……一
七十四首（自昭和五年四月至昭和十年八月短歌建設より）

冬崖……二〇
二十四首（自昭和十年五月至昭和十年十月短歌澎湃より）

迅雷……二七
五十一首（自昭和十一年一月至昭和十二年二月短歌科より）

飛ぶ如く

霜

（名岡濱太郎に）

華のやうにその朝の霜がきびしい　友の死にあふ黒い喪
章を着ける

歡聲が聞える

チョッキのポケットへ　銃彈のやうに莨を裝塡して　僕
は憂鬱な散歩にでかける

何處かに　絶えず蜂起する一群がある　僕には　その歡
聲がよく聞える

何かの契機が　一寸火をつけたらいいのだ　それをごん
ごん燃せばいいのだ

一枚の海

突き放された車輪が　そつと廻りやむ　七百メエトルの
空の　青い氣流

言ふこと無し　あつと思ふ間の眼の下に　早やある一つ
の地上

敎へられて機の影を搜す海上　浮べられた汽船ら　長く
水脈をひき

おつ　何といふ深みをもつガラスだ　一枚の海に射しこ
ほる陽だ

窓をひらけ　氣流をみよ　するごく冷たく機を包む　影
のないそいつ

上昇する機の意志を　瞰に感じる　客室に床をしつかり
と踏まへる

ほう　張切つた針金をみろ　翼の聲を聞け　ぐんぐん壓
してくる大氣の厚みだ

俺をみよや　俺とは知るまい　大都會の盛り場の雜踏に
人等蠢いて

デパアトの屋上に手を振る人間共へ　爆音に消される笑
ひを聲たてる

下界　下界　下界　そのすばらしさの中に　人間どもは
居り

あはつはゝゝ　何がそうさせるか　しつかり椅子を掴ん
で　下界へ笑つてゐる

兒と母の歌

とても覺めない妻が寢顏の疲れに　醉ふた重さの外套を
ぐさりと脫ぐ

喉を流れ　食道を亘り　胃壁に泌みとほる　醉後の水を
汲めと命じる

カアテンが引かれるやうに　妻は眼をとぢる　その暗い
瞼へ　顏をそむける

何の涙が流れるのか　妻の寝顔をまじまじと見るばかりに

妻も哭き　兒も泣く夜を　私は怒り　背むけてさて眠れぬ

牛乳をうまうまと言へや　父よりも母よりもまだ言はぬ
唇の赤さに

春の雪ふる

見上げる空の　白々とした混沌に　雪の雪らしくない大
群が流れる

落ちる雪　飛ぶ雪　流れる雪　明るい雪　暗い雪　速い
雪　遅い雪と降つてくる

見上げる上の上にも　まだ上にも　遠く落ちてくる大群
の雪の上に　尙雪はある

見れば見れば　果もなや　いつさんに迫る雪と　雪と雪
と雪と

白つぽい空の奥から　雪は飛び　雪は舞ひ　まだ雪は押
しよせてくる

くろぐろと大群の雪が流れる　空に湧き　空にひろがり
ぐんぐんと流れる

遠く流れる雪片の行方を見失つてしまふ　後から後から
雪は壓倒してくる

曇つた網膜のやうに　空の片隅に太陽がある　ひたと押
し流れる雪の力強さ

鳥も飛べ　私も流れる　ぐんぐんと　雪たかく湧く空の
白さへ

上昇する空間　大地　私　雪は眉につみ　雪は頰を撲ち
とても敵されぬ慍りを思へ　さんさんと　ごうごうと
春の雪ふる

哀悼

（土田杏村氏に）

新聞をひろげるや　ぎきんと　太い黒線の名前を　腹に
感じてしまふ

廿五日午後一時逝去　と新聞の字を睨めど睨めど　とり
つくしまもない

突き放されて　兒なら泣く朝に　溢れてくる掌を　ぢつ
とみつめる

汽車はがやがやとボキントをわたる　新聞の一點に　眼
据へてみじろがぬ

リベットを投げる

煌々と　リベットを燒く　この鐵の火の色の輝かしさを
みろ

灼熱したリベットが透明にみえる　しんと靜まりかへつ
てゐる鐵の意志はどうだ

リベットがくわつと燃えて火になるのを　巨大なハンマ
アでまち構へる

火になりきる刹那のリベットを待つ　鐵骨を踏まへて
しつかりと佇つ

火になつたリベットを拋る　受ける　差込む　毆る　鍛
へられるものゝ荒々しい順序

爛と燃えたリベットを投げる　かしめる　鐵骨の體系が
がつしりと組まれる

暮れて鳴りやまぬ鋲打機の音へ　鮮な火の線が　はつと
投げられる

發止と打込まれるリベットを思へ　ハンマアの意圖にひ
しやけはてる　その

火になつたリベットをかしめつけると　鐵の組織は　颯
とそれを冷してしまふ

思ひ出す

妻が陣痛の痛苦を思ひ　なにかに　むづと肩先をつかまれる

颯爽と　街に女を見かへる　そんな日はもうあるまいと
思ひ　家へ這入る

行きずりにふと見た黒いアフタアヌウンの女を　美しかつたと思ひ出す

華のやうな女を乘せて　ほつつり　思慕の闇へ自動車が
消えさる

『會議は踊る』を見る

遠い昔のとほい國の話　オペレッタの幕がおりて　水の
やうに胸にあるもの

華かな色彩を見たもんだ　兒と妻とのくらしに居る　夜
中の夢に

なにか麗はしい音樂が鳴つてゐる　華かにとほく　華か
にはるかに

馬車に乘つて　歌に搖られて　嬉しく涙つほく僕が運び
去られた

父を燒く

一　麥　畠

遠く　よせてくる　穗波の痛さよ　海の果の　なにか賴
りないできごとのやうに　ひたりひたり　心の岸に洗ひ
出される　哀しみの麥畠は　一畦ごとの　色着きのちが
ふのにばかり　心ひかれて　風のある道を　父の柩に從
いて行つた

二　にくい夕陽

墓山の石疊みちを　ながいと思ふ　弟の柩の去年の若葉
父の柩のこさしの若葉　黑い喪章をふきぬける風と若
葉よ　白い石段を一つあがれば　白い柩も一つあがる
呆心の石をかぞへて　泣かんばかりの我のみか　夕陽ひ
とつの　にくにくしい赤さ

三　短　歌

幽鬼のやうな　葬儀人足ども　あらはれて　父の亡骸を
折りまげる——

骨　それよりもろく燒けくづれた　父の好みの酒壜ばか
り　みてゐた

父の死から出勤するこ　休んでゐたゞけの仕事が溜つてゐる　默つてそれにかゝる

忌引屆を書いてゐる　お父さん　私は人なかで働いてゐます

タクシィの窓に　唇紅の濃い女を見た　その女にもある父を思つた

運河を越える舟に　鬱い濁つた水をみてゐた　思ひ出せない父の思ひ出なぞ

不吉な世界

視野いつぱいに擴つて　大きな昆虫の翅音が　毎朝こびかゝつてくる

ある朝　目覺めるこ指先の皮膚がうすれ　はげしい秋の腐蝕作用がはじまつてゐる

木の葉が　梢を離れて舞ひおりてくる　靜かな順序を見極める

夕陽に向つて目をつむる　不吉な世界が　あかく溢れてくる

横に流れる光　そいつの眞只中に　生きてゐる夕陽の思ひは悔ひられてくる

防波堤のはなは海ばかり　みちあふれた光が　無限にさびしくなる

恣りは青く梧桐の芽が伸びるのに　五月の雨が冷たく濡らしてくる

堪へがたい海

防波堤は　白く荒くれた海が打つける　牡蠣殻は冬を冷たいと感じはじめる

船のない海だけの波　防波堤は　のこぎりのやうに砕かれてくる

ひたすら船を突きとほして　波のゆくての海も　波ばかり

痛いばかりのするどさの波の　波にあふ波もくづれ果てゝしまふ

月の夜の白い雲白い波　白いマストを鋭いテエブのやうに風が捲いてゆく

月の夜の暗い海暗い船　暗い帆布の蔭にきらきら光る凍魚が棲みはじめる

冬　崖

釣・風・風

竿を垂れる　無數の青い魚がよつてくるので悲しく眼を
こぢてしまふ

少女が　きゆつと顔をしかめるほどの　砂埃の風に　僕
も眞向はれる

高架から軈て山の驛へ着く電車に　一つの思索を吹きつ
けられてゐた

南の雷雨

だつと躍いて　躍ちあがりさまの雷　南の硝子戸はびい
んとふるふ

とゞめ敢へぬ怨りを鳴りはなす雷　放膽なそいつに押し
きられる

くつくつと忍び笑ひや春の雷　それから　夏へ移る季節
のあらあらしさ

深い森のやうな豪雨のなかに書き纒ぐ文字の　インクが
黝んでくる

地が濡れ　蟲蝼が濡れ　樹が濡れ　じつとりと疊の上の
くらしが濡れてくる

燈をともして　低くある家と家　太古から降りつゞく雨
の容謝ない

地肌は洗はれた石塊ばかり　冷たい念りを押へて　雨を
見てゐる

にがい雲

山肌に突き當つた雲がいちめんに這ひあがつてくる　許
し難い憤りをぢつと堪へる

みるみる擴つて山嶺に私をつゝむ雲　逃げきれぬ心の冷
たさを感じる

風のやうに湧きあがる思ひがあり　遠く斜面の殖林地帶
をみてゐた

許し難い憎しみを持ち　登りつめた山の　きりきりと崖
の高さ

はるかな渓谷を舞つてゐる鳥もある　崖上にゐて憎しみ
の冷たさを忘れ得ぬ

高山の嶺にしてなほ消えがたき　これの憤りはかなしむ
べきか

いいや許せない　そんな憤りの　さほい斜面は　日が翳
つてくる

草ばかり小松ばかりの山嶺に　むつつり突立つてゐて
雲に包まれてしまふ

胸をひらいて　胸を吹く風にふかれる　雲に濡れた胸腔
の　しろい冷たさ

殖林の杉の穂にからみ　草に這ひ　山嶺を越えて　また
渓までの雲の速さ

尾根を歩くときの　憤りに似た心　けはしい岩山の岩を
踏みしめる

悼　中内源治先生

香煙　讀經　そんな裝置のむこふから微笑まれて　術も
ない

莞爾とある微笑　白い額ぶちの　空しい距離を押しはな
される

合掌　てのひらに感じるてのひら　ぬくいばかりのみ佛
の親しさ

迅雷

ロマンス

雲の奇怪な貌　月のミゞかぬ渓間には髭のある蟹族ら這
ひまはり

こんこんと月の牡犬が鳴き叫び　石の廊下にナイフを握りしめるよ

赤い標識を衝へてから　遁走する泥溝鼠ら　寢園には短銃が鳴りひゞき

月夜のぬくい砂丘　昆布のかけの珊瑚樹　そして　くらけの游泳する

濡れに濡れ　しとゞ濡れた蟋蟀が　身動きもならず花かと思ふであらう

敏感に鳴る傾向の電鈴よ　黒い扉には月の暈なぎが掛けられてある

薄尾花のかへり路かや　豆絞りの手拭で詩人が白い蛙を包んでしまふ

鳩と主賓

しやべつてゐる時間の空白　しんと聽かれてゐる靜けさに激しく立向ふ

汽車よあたゝかいか　驛であるだけの　くらやみの灯に佇つ

シトロハイム氏は鳩に豆を喰はせてゐる　一對の若者が片隅を通過する

しらじらと光つてゐるレエルほどの日暮　黄色く　ほつと灯られる

瞬間　花なごに翳られてしろいテエブルの料理　主賓は小鳥の向ふに居る

ビイクア・ロオレイ氏のつもりの煙草　ゆるやかな燐寸のすられる匂ひ

試練の西風に眞向つて歩く　この足ごりは確かだと思はうとする

一瞬　あらゆる憎悪を投げ合つてすれちがつた電車に不氣嫌にゐる

瞬間　よろこびの睦言に溶け合ひ　深夜の電車が行きちがひ　離れ去り

あなたが僕の妻でも　僕があなたの夫でも不自然はない
あなたと僕が街に擦れ違ふ

執拗に同じ窓を遠ざかる灯　やがてけむり程の　雲ほどの疲れ

冷たい凍土に　ぐさり突きさゝつてゐる白い大根の　野太い逞しさ

夜明け方　ざはめいて跫音がゆきすぎる　不安な枕も女は不安がらない

姿勢

鋭い齒で嚙み着く愛情を識つてゐるから　お前の牡犬は
白い腹をみせてねてゐる

股にかぶりつく齒の鋭さに　牡犬は　はぢらはぬ眼をい
つもつぶる

雲雀のおりる姿勢　曇り日のありやうを　草は青臭い怒
り方する

サイレンが鳴りわたる　草のある草原の不安に　なみだ
ぐんでゐる

塵燒場の赤い煉瓦　拭ひきれない心の汚れが　むつとぬ
くゝ思ひ出される

果樹園

巨大な梨をつくつてやらんと　ねぇさんかぶりの水々し
い女が紙袋をきせてゐる

果樹園に白い紙袋が搖れてゐる　豊穣な歡びが漲つてゐ
る靜けさ

高貴な繪のやうに空にある雲　水氣の多い梨がづつしり
膨んでゐる

しつれん

悔おほい歴史の嘘　いつかの愛情へ　やさしい肩で泣かれてゐる

組んだ脚がしびれ　痺れた脚を組み直す　あゝ　そんな
戀情に斯くも坐つてゐた

なにもない人世に泣いてゐる肩の波　愛情は時にむなし
い貌ではないか

やかましい空の色よ　笑ひ話は　いつも思索家がつくる
のである

屹と前をみてゐた　なにも思はないほどの疲れを樂しん
でゐる

その尾燈はなぜ赤いか　今日も　遠ざかる距離の忘れ難
い痛みやう

片すみにゐる偶然にたよりすぎて　考へてもはかない瞳
をみつめてゐた

ひなたの糞が何故みづ色か　ごんなはかない瞬間も　ま
たとあるものでない

眼をとぢよ　赤い空　黄色い斑點　むなしさに血が湧き
そして濁つてしまふ

死ぬ奴は死ね　乾いた季節の綠に向ひあつて　鹽の皮膚
を剪つてゐる

常識のやうに厚い戀情であつたと　手觸りの粗い手套を
きゆつとはめる

所詮　れつあくの思慮に外ならず　にがい煙草を　つよ
く踏みにぢる

或る程度の嘘をつかうと思ひきめると　日暮の列車がは
けしい汽笛を鳴らす

辛く重く苦しく　それを思ひつゞける樂しみに　眉をし
かめてゐる

血くだる

つつうゝとくらい便壺にある音の　あれは血のくだるの
だと　眼をつぶる

「肛門裂け血奔る」いや笑ひごとでないと思ふのへ　ばあ
つと無慘な赤いやう

碧血　きれいすぎるその夥しい赤に　ぎしんと　冷たい
ものを感じる

大便をひり出すやうに血液が流れでる　俺が青ざめてゆ
くと思ふ

痛みのない血が流れる　ほたつ　ほたつと不安な深みへ
墜ち込んでいつた

無題

旅客機が雲にはいる　風のあるサンルウムは風景がのび
縮みする

寄せるより早くうち返される　波のきびしい秩序をみて
ゐる

むつつり坐つてゐると　笑ひ明るく酒飲んでゐる青年の
青年に負けてしまふ

淡々と　水のごとく　僕をとりまく　妻の愛情は逃げむ
すべなし

あとがき

私共三人の生きてゐる友情は忽然として終つてしまつた。「まだ二人ゐる。やがては一人となるべきです。」ときびしい言葉を與へてくれた友人がある。その言葉を考へてゐると、むしろかうして二人殘つたことが恐ろしいことのやうにも思はれてくる。朔原と二人で「お互ひに一人遺されることがあつてはたまらないから、氣をつけて生きよう。」と話し合つた。この作品集に就いて何かと相談してゐると名岡はまるでその横にゐて、今までと同じやうに、一つ一つに贊成してくれてゐるやうな樂しい氣持であつた。

名岡のものゝ整理その他すべて朔原がやつてくれた。私はたゞ自分の分を纒めたゞけである。そのやり方も、言はゞ私共三人の間では名岡生前からの傳統なのだ。なにもかも三人でやつてゐた當時の儘のやり方であつた。この歌集が出てしまつてから、はじめて私達は、殘された二人のさびしさがわかるのかも知れない。

私の歌は「短歌建設」「短歌澎湃」「短歌科」への發表作品のうち先の兵隊歌集『掌と知識』に整理分を除いて全部で約四百首あつたが、さて自選してみると、この百五十首を得るのに甚だ恥かしい思ひをせねばならなかつた。これで私の歌は昭和二年の第一歌集『地下鐵サム』以後「鄕愁」に發表した分と、こゝに採錄した三雜誌以外の歌誌に載つたものだけが未整理となつたが、數の上では相當あると思ふが、何れあまり期待はもてないものばかりである。それらは何時になるか知れないが、この次の作品集の折に纒めて整理したいと思つてゐる。

何よりも、名岡の靈前へ出來上つたこの歌集を、白く積み上げることが第一の喜びである。

昭和十四年一月

福田米三郎

392
S
42

昭和十四年三月十日印刷
昭和十四年三月十五日發行

作品集 澎湃 卷二

飛ぶ如く

（非賣品）

著者 大阪府南河内郡柏原町四〇五 福田米三郎
發行者 大阪府南河内郡柏原町四〇五 福田末次
印刷者 濱寺市北向町二二 中川幸五郎

發行所 大阪府南河内郡柏原町四〇五 短歌澎湃社

終